

心の色

奄美市立市小学校 五年 浅野 恵深

初夏がきた。私は、奄美大島行きの飛行機に乗っている。前列の男女は観光客だろうか、着陸間近の奄美大島の海を見ながら、この色は「エメラルドグリーン」なのか「コバルトブルー」なのかと議論を始め、二人とも自分の表現がいかに正しいかを熱く語っていた。しかし、私にとって海の色なんてどっちだってよかった。私は日よけのシェードをぴしゃりと下ろした。

最近、どうも親との関係が良くない。なにかにつけて言い争いになるし、顔を合わせるのが面倒だ。

「夏休みを待てば。」

と母は止めたが

「どうしても今じゃなきや。」

と祖母の住む奄美大島に行くことにしたのだ。

二年ぶりの祖母は変わらず元気で、駐車場の車の脇をぬってすたすた歩く。六年生の私でも小走りしないと追いつかないぐらいだ。

「おばあちゃんもいつまで元気か分からないから、一回を大事にしてね。」

見送りで母に念をおされた。そう言えば祖母の背中では少

し小さくなったような気もする。

祖母の家は空港から二時間ほど南に下る。街を過ぎ、いくつものトンネルを抜け、道はばは次第にせまくなる。集落目のくねくね道になると、みんな「車酔いする。」と言うが、曲がる度に木々の間からのぞく海の見え方が変わり、おもしろい。ガイドブックにのらなくても奄美の海はどこだって美しい。到着すると祖母は、

「おやつにしようね。華ちゃんふなが好きな舟やきを作ろうね。」

と台所へ向かう。祖母の舟やきは最高だ。母は、

「華のためにも、もっと練習しないとね。」

とよく笑っていたが、最近の母の笑顔を思い出せない。遠くでヤギの鳴き声がする。低い鳴き声に混じって高い鳴き声も。この春に生まれた子ヤギだろうか。そんなことを思いながら散歩をしていると、目の前に円型の建物が現れた。

「あつ、この場所。」——西古見にしこみの観測所跡——。

この前、祖母が送ってきたスモモを包んであった新聞の一面に特集が組まれていた。奄美には多くの戦跡があり、ここは重要な場所の一つとして敵の侵入を見張り、山かげのほう台に知らせる役目があったこと。この観測

所跡などをふくめて本格的に調査・保存活動が始まったことなど。こんなに近くにあったなんて。建てられて何年だろう。記事にくわしく書かれていたが思い出せない。

「ええっと、原爆が投下されて今年は七十八年目かー。ということは、少なくともこの建物は八十年近くここにあるんだ。」うす暗い観測所内は、しつ度は高いがひんやりとしている。今でも残る観測窓から遠く大島海峡が見わたせる。窓の上には、はっきりと海峡の島々をえがいた絵図が残る。祖母が生まれるほんの少し前、ここには敵の侵入をいち早く見つけ、しゅう来にそなえる人がいた。顔も名前も知らないその人はどんなことを思っていたのだろう。

窓からの風が気持ちいい。そろそろ帰ろうかと後ろをふり向くとヤギがいた。きつとさっきの二頭だ。子ヤギは大きなヤギからはなれようとしなない。大きなヤギはゆっくりとこちらへ近づき、「ベエー」とひと鳴きし、私をじつと見つめる。屋内がうす暗いせいもあり、黒い横長のひとみでじつと見つめられると、心の中まで読まれてしまいそうだ。思わず、

「あなたたちは親子。仲よしだね。うちとは大ちがい。私はお母さんといたくなくてね。もうしばらくここにいろからよろしくね。」

と自己しようにかいをし、ヤギのぼこぼこした背中をなで

ると、ヤギがとつ然話し始めた。

『親うやに生なされてどふ 此こん明るさ見ちやる。吾生わんちやる親ひやくせの百歳願お。』シマにはね、先人の言葉が伝えられているのよ。この言葉は『親に産んでもらったからこの世に生まれてきたのです。生んでくれた親が百歳まで長生きするよう願おう』という教え。親は大切よ。』

子ヤギも続けて、

「わたしは、あんまが大すき。いつでもいっしょ。」と、親ヤギの周りをピョンピョンとびはねた。少し前までは私も母とこんな感じだったのにな。

ヤギがみさきの方へ行くので私も外へ出た。

「舟やきができたよ。」

祖母が私をよびに上がってきた。祖母の笑顔が母と重なる。そうか、祖母がいて母がいて私がいる。そして、八十年前のこの場所で見張り続けていた人たちこそ、命のつながりを考えていたにちがいない。自分の中の考えがつながったとき、遠くで草を食べていた親子のヤギが「ベエー」とひと鳴き。ん。今、笑った。笑ったよね。静かに広がる海峡を見ながら私はつぶやく。

「エメラルドグリーン：コバルトブルー……」

どちらも正しいが正解ではない。この海の色は奄美の山の色であり空の色、そして何より私の心の色だ。平和

だから感じられる色の美しさ。平和だからつなぐことができる命――。遠く三連立神から風が吹きぬけていく。
奄美大島に夏がきた。